「のと恋路号」殺意の旅

Kyōtarō Nishimura

西村京太郎

中公文庫

中公文庫

「のと恋路号」殺意の旅

定価はカバーに表示してあります。

1992年11月10日初版
1997年10月30日 4版

著　者　西村京太郎

発行者　笠松　巌

発行所　中央公論社　〒104 東京都中央区京橋 2-8-7　振替 00120-4-34
TEL 03-3563-1431(販売部)　03-3563-3664(編集部)

©1992 CHUOKORON-SHA,INC. / Kyotaro Nishimura

本文・カバー印刷 三晃印刷　用紙 王子製紙　製本 小泉製本

ISBN4-12-201946-X　C1193　Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

「のと恋路号」殺意の旅

西村京太郎著

中央公論社

目次

第一章　のと恋路号　7
第二章　刑事　31
第三章　失踪　55
第四章　捜査会議　79
第五章　K・T　102
第六章　雨の金沢　126
第七章　山中温泉　150

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

第八章　ハワイ　174
第九章　伝　言　199
第十章　セブ島にて　223
第十一章　対　決　246
第十二章　一つの解決　270
解　説　山前　譲　295

「のと恋路号」殺意の旅

第一章　のと恋路号

1

太宰治は、悲しいから旅に出るのですと、書いた。

井岡あや子の今度の旅も、また、悲しみからのものである。ただ、帰京する時は、その悲しみを忘れて、出来れば、新しい出発にしたかった。

六日前、中原が、突然、自殺した。

中原雅男。二十九歳。身長一七六センチ。M化学中野研究所勤務。

いや、そんなことは、どうでもよかった。あや子にとって、大事なのは、彼女が、中原を、愛していたことである。

中原もまた、自分のことを愛してくれていると、あや子は、信じていたのだ。

勝手な自惚(うぬぼ)れとは、思わない。自分に対する彼の態度や、言葉で、愛されているという実感を持っていたし、結婚の申込みも、されていたのである。

それが、突然、自殺してしまったのだ。
自殺自体にも、もちろん、ショックを受けたが、同時に、自分に何の相談もなく、彼が死んでしまったことも、ショックだった。
中原にとって、自分は、そんな存在だったのかという当惑であり、不満だった。
中原の葬儀には、M化学の上司や、同僚も来ていたが、金沢支社からも、管理課長が、来ていた。
十日前、中原は、金沢支社へ出張していた。その仕事から帰ってすぐの死だったから、金沢支社からも、管理課長が、参列したのだろう。
あや子は、その管理課長から、中原が、仕事を終えたあと、能登へひとりで、出かけたときいた。
「『のと恋路号』という新しい車両が、運転されているんですが、それに乗って行きたいというので、私の方で、予約しておきました」
と、管理課長は、あや子に、いった。
中原の能登行が、今度の自殺に結びついているのかどうかは、わからない。
ただ、あや子は、中原が、なぜ、自分に、何の相談もせず、七階のマンションから、身を投げたのか、その理由を知りたかった。
「のと恋路号」は、JR七尾線の七尾から、午前九時二四分に出発し、第三セクター

「のと鉄道」の、珠洲まで走っている。

あや子は、五月十八日の午後、金沢へ向った。

金沢で一泊し、「のと恋路号」の予約をした。

二両編成で、定員は七十六名。一番から四十番までは団体席で、四十一番から七十六番が個人席である。

十九日の朝は、旅館の人に頼んで、朝食を早く出して貰い、あや子は、金沢発午前八時〇一分の急行「能登路1号」に、乗った。

これに乗れば、七尾で、お目当ての「のと恋路号」に、乗れるからである。

連休が終ったのと、ウィークデイのせいで、「能登路1号」の車内は、すいていた。

あや子は、座席に腰を下すと、能登の観光地図を広げた。が、楽しむために、見るという気分には、なれなかった。

どうしても、中原が、なぜ、「のと恋路号」に乗ったのかに、気持が、いってしまうのである。

（なぜ、その時、電話で、呼んでくれなかったの？）

という、口惜しい気にもなる。

もし、その時、一緒に行こうと、電話してくれていたら、あや子は、一も二もなく、休暇を取って、金沢に、飛んで行ったろう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

（ひょっとすると、その時、一緒に行く女性がいたのではないだろうか？）

とも、思ったりする。

中原は、もう死んでしまっている。それとわかっているのに、口惜しくなってくるのだ。

あや子は、七尾で、降りた。

3番線ホームで、待っていると、二両編成の「のと恋路号」が、入って来た。

最近流行の、大きな前面ガラスを持った洒落た車両である。

第三セクターの「のと鉄道」が、観光の切り札として、製造したというだけにホワイト、オレンジ、それに、イエローの三色のカラーが、斬新だった。

中に入ると、前部には、視界のいいパノラマ展望席があり、そのうしろには、リビングシートが、設けられている。

あや子は、乗り込むと、車内を、見て廻った。

鉄道好きだった中原も、きっと、そうしたに違いないと、思ったからである。

二両連結の1号車の後部には、ジュースやウーロン茶の自動販売機が、置かれている。

2号車に入ると、車内販売のカウンターがあり、新聞も、置いてあった。

リビングシートのところには、カラオケセットが置かれてあるのも、いかにも、北陸の観光列車の感じだった。

九時二四分。定刻に、「のと恋路号」は、七尾を発車した。
あや子は、リビングシートに腰を下し、窓の外の景色に眼をやっていたが、次の和倉温泉を出てすぐ、二十五、六の男が、
「ご一緒しても、構いませんか？」
と、声をかけてきた。

2

車内は、五〇パーセントほどの乗客だった。
二つあるリビングシートにも、あや子の他には、家族連れが一組、腰を下しているだけである。
それなのに、わざわざ断って、座った若い男に、あや子は、変な人だなという眼を向けた。
が、男の方は、変に、なれなれしく、
「おひとりですか？」
と、きき、あや子が、黙っていると、
「僕も、ひとり旅で、この列車が、面白そうだから乗ったんですが、なかなか、感じがいいですねえ」

と、車内を見廻している。

どこか、運動選手のような体格で、別に、嫌いなタイプではなかったが、今は、死んだ中原のことを、考えていたかったので、あや子は、返事をしなかった。

男は、煙草を取り出したが、吸っては、あや子に悪いと思ったのか、また、ポケットにしまい込んだ。

「僕は、目的なしの気ままなひとり旅ですが、あなたは、どこまで、行かれるんですか？」

と、きいた。

あや子も、どこまで行くという当てもなく、乗ったのだが、それは、気ままなひとり旅だからではない。

中原が、どこまで行ったか、知りたかったからで、一応、終着の珠洲までの切符を買っていた。

窓の外には、田植えをすませた、青々とした水田が広がり、その向うに、海が見えている。

波静かな七尾湾である。

男は、何か、話しかけていた。この列車に乗るには、乗車券の他に、パノラマ券を買わなければいけないのは、少し高すぎるとか、カラオケは好きですかとか、いっている

のだが、あや子は、生返事しかしなかった。
（中原は、どこで、降りたのだろうか？）
と、それを、考えていた。
七尾から、珠洲まで、「のと恋路号」は、十の駅に停車する。
和倉温泉は、もう過ぎてしまった。
あとは、のと穴水、甲（かぶと）、鵜川（うかわ）、宇出津（うしつ）、九十九湾（つくもわん）小木（おぎ）、松波、恋路、鵜飼、そして珠洲である。
どこで降りたかは、勘に頼るより仕方がない。
一〇時〇七分、のと穴水着。
（ここじゃないわ）
と、思った。そんな気がしたのだ。
ここまでは、ＪＲの七尾線で、これから先が、のと鉄道になる。
運転手も交代し、車内販売のコーナーには、のと鉄道の若い女性が、乗って来た。
三分停車で、発車した。
ひとりで勝手に喋（しゃべ）っていた男は、いつの間にか、あや子の傍から、いなくなっている。
のと穴水で、いったん、山間（やまあい）に入った列車は、また、海沿いを走る。
二十分ほどで、甲に着いたが、ここで、小学生の団体が乗って来て、急に、車内が、

賑やかになった。団体といっても、十五、六人である。それでも、子供たちは、元気で、うるさい。

鵜川、宇出津と、停車したが、あや子は、降りなかった。

九十九湾小木で、小学生たちが、降りて行った。ここから、九十九湾の遊覧船が出ていて、それに、乗るらしい。

相変らず、窓の外には、水田と、その向うに、海が、見えている。水田と海の間には、自動車道路が、伸びていて、時々、走っている車が、眼に入った。

一一時二〇分。松波。

次が、恋路である。

あや子は、急に、腰を上げた。

（中原は、恋路で、降りたに違いない）

と、直感したからだった。

理屈ではなかった。松波駅で、「次は恋路」の表示を見た瞬間、中原は、恋路でと、思ったのである。

3

恋路は、小さな駅だった。

単線の線路に沿って、片側に、幅の狭いホームがある。
無人駅だから、もちろん駅員もいない。
連休時は、多分、若者が、沢山降りたろうが、今日は、三人だけだった。
（あれ？）
と、あや子が、眼を大きくしたのは、あとの二人のうちの一人が、例の若い男だったからである。
もう一人も、男だったが、さっさと、ホームから姿を消してしまった。
あの男は、カメラを、肩に下げた恰好で、あや子に近づいてくると、
「同じ駅で降りるなんて、偶然ですね」
と、声をかけてきた。
「私は、急に、降りたくなっただけですわ」
と、あや子は、いった。
「僕もですよ。恋路という名前が、気に入ってね。そこの待合室には、大学ノートが、置いてあって、ここへ来た人たちが、思い出を書きつけているらしい。見てみませんか？」
と、男は、いう。
あや子は、少しばかり、相手が、うとましくなってきた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com